

カウンセリング評価尺度の開発

— 初学者と研修2年修了者との比較 —

○田所撰寿
(作新学院大学)

松本浩二
(関東学院中学高等学校)

1. 目的

わが国では1950年代以降、カウンセリングが欧米から取り入れられ、主に教育領域においてカウンセリングトレーニングが行われてきた。カウンセリングの基本的スキルについては、Rogers, C.R. (1957)によるカウンセラーの基本的態度(「受容」「共感」「自己一致」)や、Ivey, A.E. (1971)が開発したマイクロ技法(例えば「感情の反映」や「開かれた質問と閉ざされた質問」など)などが挙げられる。しかしこれらの技法を学ぶ機会はあるが、訓練を受ける者がそれらのスキルをどれだけ習得できたのかについて具体的に評価する方法も手段もないのが現状である。

我々は社会に効果的に機能するカウンセラー養成について、本学会の自主シンポジウムで議論してきた(松本ら, 2012; 田所ら, 2013; 田所ら, 2014)。その中でトレーニングの重要性を再確認すると同時に、トレーニングを評価する指標の確立を痛感した。そこで本研究では、カウンセラースキルの担保を目指すべく、カウンセリングスキル評価尺度を開発することを目的とした。

2. 方法

- (1)対象者:初学者36名(男性5名、女性31名:平均年齢48.0歳)、研修2年修了者23名(男性4名、女性19名:平均年齢49.3歳)。
- (2)調査の手続き:栃木県カウンセリング協会(TCA)カウンセリング研修講座において、初学者の受講生に対しカウンセリング演習の最初に時間にカウンセリングスキルに関して自己評価してもらった。また同協会において第1筆者のカウンセリング演習を2年受け修了した者を対象として(研修内容および、研修時間は表1を参照)、同様にカウンセリングスキルを自己評価してもらった。
- (3)調査時期:2015年2月(研修終了時)と5月(研修開始時)。
- (4)評価ツール:現在アメリカで使用されているカウンセラーのスキル評価尺度であるSkilled Counseling Scale(Urbani et al., 2002)およびCounseling Skills Scale(Eriksen, K.P. & McAuliffe, G.J., 2003)を基に作成した「カウンセリングスキル評価尺度」を使用した(表2を参照)。

表1 TCA カウンセリング研修講座カリキュラム

領域	1年目	2年目	合計
A. カウンセリング心理学	56時間	46時間	102時間
B. カウンセリング・アセスメント	8時間	24時間	32時間
C. カウンセリング演習	64時間	56時間	120時間
D. カウンセリング実習	—	—	—
E. カウンセリング諸領域	8時間	16時間	24時間
合計	136時間	142時間	278時間

※ 領域は日本カウンセリング学会認定カウンセラー養成カリキュラムに準じている

表2 作成したカウンセリングスキル評価尺度

- I. 探索の段階—①クライアントへの態度(4項目)
「時折意図的に視線を外しながら、クライアントを見つめた。」など。
 - I. 探索の段階—②質問と繰り返しの(3項目)
「クライアントが表現したことを簡潔、正確、明確に言い換えた。」など。
 - II. 理解の段階—①言い換えによる共感(3項目)
「クライアントが直面している問題の内容や感情を簡潔に述べた。」など。
 - II. 理解の段階—②言葉の言い換えによる共感(4項目)
「クライアントもしくはカウンセラー自身の「今」ここで」の感情、言語的な表現を理解し、クライアントに伝えた。」など。
 - III. 行動を起こす段階—①意思決定(3項目)
「変化を促すのか、しないのかについてクライアント自身が明確に判断するように促した。」など。
 - III. 行動を起こす段階—②協議してから決める(3項目)
「行動を起こすことで起こりうる問題をリストアップし、その行動に対してクライアントが責任を持ち能動的に取り組むという合意を得た。」など。
- ※全20項目、「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法を用いた。

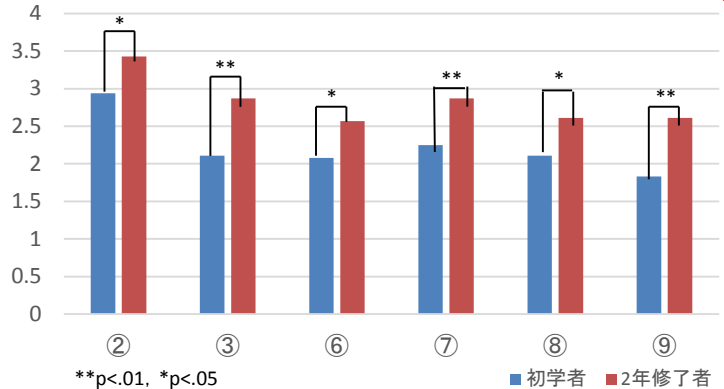


図1 有意差のあったスキルの項目

② リラックスした姿勢で、うなずきやしぐさを使って話を促した。
③ 重要な感情や事柄の言葉を繰り返し、中心テーマにクライアントが焦点を当てられるようにした。
⑥ クライアントが表現したことを簡潔、正確、明確に言い換えた。
⑦ その話題に関して、クライアントが話していたことの概要をまとめた。
⑧ クライアントが直面している問題の内容や感情を簡潔に述べた。
⑨ クライアントがあいまいな一般例を話すとき、どのようなことを想定しているのか具体例を尋ねた。

3. 結果と考察

初学者と研修2年修了者のカウンセリングスキルを比較したところ、図1に示した通り、20項目中6項目に統計学的な有意差が見られ、研修2年修了者の方が、これらの項目に示されたカウンセリングスキルについて獲得されていることが明らかになった。「探索の段階—クライアントへの態度」において4項目中2項目(+有意傾向1項目)、「探索の段階—質問と繰り返しの」において3項目中2項目(+有意傾向1項目)、「理解の段階—言い換えによる共感」において3項目中2項目、「理解の段階—言葉の言い換えによる共感」において4項目中0項目、「行動を起こす段階—意思決定」において3項目中0項目、「行動を起こす段階—協議して決める」において3項目中0項目で有意差が見られ、評価尺度の下位領域がスキルの習熟度を示していることも明らかとなった。

今回の結果から、第一に作成したカウンセリングスキル評価尺度は、ある程度の客観的指標になりうるということが明らかとなった。第二に、カウンセリングトレーニングを客観的評価スケールを用いて評価したときに、TCAで行われているカウンセリング研修講座がカウンセラー養成において、効果的な変化を受講生にもたらしているということが明らかとなった。

ここで強調しておきたいのは、カウンセリングスキルの教育方法である。Rogers (1951)はカウンセラーの持つ態度(哲学)とカウンセラーの使用するスキルは表裏一体であると述べている。筆者らがやっているカウンセリング演習はスキルの獲得を一義的な目的としておらず、人間観というクライアントと向き合うための哲学を教育していくことによって、スキルも付随的に身につけていくものであると考えている。カウンセリング心理学を特徴づけるもっとも大切な要因の一つは、そのカウンセラーがどのような人間観を持っているのかということである。カウンセリング心理学者は、個人は変化することができるし、満足する生活を得ることができるし、自立することができる、自分が持っている資源を最大限利用することができるという人間観を持っている(Gelso, C.J., Williams, E.N., Fretz, B.R., 2014)。人間観を学ぶプロセスにおいて、その哲学を体現する形でカウンセリングスキルというものが身につけていくことが望ましい。

4. 今後の課題

今後の課題は非常に多い。評価尺度を精査していくことに加えて、自己評価だけでなく他者評価とどのような関係があるのかについて検討していく必要がある。例えばロールプレイにおいて、トレーナーやオブザーバーの客観的評価とどのような関係があるのかについてそれぞれの視点から検討していく必要がある。自己評価、トレーナーとオブザーバーの他者評価を合わせた評価尺度を作成していくことが求められる。一方養成プログラムの内容としては、今回初学者と差が見られなかった項目について、2年間のカリキュラム修了後どのように伸ばしていくことができるのかについて検討する必要がある。いずれの研究に関してもすでにとりかかっており、次年度においてある程度の報告を予定している。